「魅力ある授業」



(東京大学教育学部教授)

授業」の私なりの解明を試みようと考える。 味や構造を次第に明示的にすることを、現象学(荻野恒一、 とに私は気づくのである。物事に黙示的に隠されている意 て考えてみると、次第にとらえどころがなくなってくるこ かも知れない。しかし、「魅力ある授業」とは何かを、改め とは何か、と問わなくともよいと「多くの人々」は考える のかもしれない。 授業」の一定の在り方をはっきりと思い描くことができる 一九八八年、参照)で「解明」と呼ぶ。ここでは、 「魅力ある授業」とは何か。人はそれぞれに、「魅力ある したがって、 いまさら「魅力ある授業」 「魅力ある

授業とはなにか?

させるべき答えはない、と言ってよい。この問いに対する 「授業とは何か?」 この問いには、 総ての人々を満足

> ない いのである。そのことが、総ての人々を満足させる答えがした背景となる考えにおいて、直ちに一致できるはずもな に、露わにならずにはいない。しかし、総ての人が、「授業とは何か?」という問いに対する答えの中に、 とにどうしてもなる。背景となるそうした暗黙の考えは、 あらゆる事柄についての一定の考えを暗黙のうちに持つこ 学と人間科学について、 どのような特定の答えも、 から出発しよう。 への答えは異なるということを、そのままに認めるとこ 理由である。で、それぞれに 人間の文化について、 人間の生きる世界についてなど、 その背景に、人間の 科学と芸術につい 授業とは . ` 総ての人が、そう 何 て、 か 自然科 次第

なりに求め続けてきた。 私も、「多くの人々」 。以下は、授業との長いかかわりのと同様に、この問いへの答えを、私

私なりの暫定的な答えである。

授業では、 ر° د۸ 様な理解・解釈を契機として、互いの世界の「出会い」 に位置づけられた教材の世界、そこに、ひとつのものごと 界内に位置づけられた教材の世界と、子どもたちの世界内 界とのそれぞれの出会いを媒介として、 とを通じて、子どもたちがそれぞれの古い世界から、 そこからさらに新しい理解 いて異なった現れを示し異なった意味をもつということを その出会いは、 らの世界とは異なる世界、異質な世界との出会いである。 として、教師と子どもたちそれぞれの世界が豊かになって についての多様な理解・解釈が生まれる。そして、その多 でもあり、 それはまた、 の世界であり、 中に成立する。 人ひとりの世界との、三つの緊張関係-- 対決と交流 ― が生まれ、緊張関係が生まれ、その結果 「授業は、教材の世界と、教師の世界と、子どもたち一 これが授業なのだ。ここでいう「出会い」とは、自 教師の世界と子どもたちの世界とが、 教材の世界に登場する人間たちの世界でもある。 より一般的には、 ゆくということも起こってくる。 それは、科学者・芸術家の世界でもある。 教材の世界とは、基本的には、科学・芸術 互いに異質な世界の出会いであるがゆえに ひとつのものごとが、それぞれの世界にお 時間の流れの中での、対決と交流が生じ、 ・解釈が生まれてくる。 もろもろの人間たちの世界 出会う。教師の世 - 対決と交流 それぞれの 教材の世

> 新鮮になってゆくこと、 子どもの世界が、それとともに教師の世界もまた、 一九八七年、八七一八八ページ参照) それが授業という仕事なのだ。 豊か に

しくとも、 を営む。 求められる、とも考えられる。さらにまた、教師が、現在だけでなく、子どもの世界よりも遙かに豊かであることが めには、教師の世界が、ただ単に、子どもの世界と異なる きないであろう、とも考えられる。だが、教師の世界は貧 を理解しておらず、また、そのように働き掛けることもで もの世界を豊かにするためにどのように働き掛けるべきか なくむしろ貧しく、そのため子どもの世界を、また、子ど たがって、教師の世界が、 かを理解していることが求められる、 もに働き掛けることにより、子どもの世界を豊かにできる の子どもの世界を理解しており、自らが、どのように子ど むしろ、 このとき、 ずからの世界を豊かにすることに努めるという道である。 う一つの極めて豊かな授業の道がひらけてくる。それは、 きない場合、教師は、子どもの世界を豊かにすることはで 教師は、子どもの世界を豊かにすることを願って、授業 ということになる。 教師に子どもの世界を豊かにすることができる 子どもと共に学び、そしてまた、 子どもと共に、子どもと一緒に、それぞれに、み 教師の仕事は、教えることであるというよりは その貧しさを教師自身が自覚しているとき、も しかも、 実際には、それほどには豊かで 教師がそのように学 とも考えられる。し 子から学ぶこと

> - 9 _

むしろ、な

その人あ

との言葉は、子どもと共に学ぶこうした、教育の気高い境 まれてくることになる。芦田恵之助の「共に育ちましょう」 根源的な謙虚さを基礎とする、 とによって絶えず何かを学ぶ」(同書、九〇ページ)という、 また、「教えないで一緒に歩く、あるいは連れ添っていくこ 八八一八九ページ)という深い洞察が生まれてくる。 とではなくて、 確信するようになるとき、「教師の第一の任務は教えるこ とを始めるとき、共に学ぶ子どもの世界は驚く程豊かにな ていく。そして、教師がそのことに気づき、そのことを 絶えず学ぶことなんだ」(林・灰谷、

それゆえにこそ、教師が子どもと共に学び、子どもを解放 ある。他方では、 どもの世界を支配し、 かさと貧しさに対応して、 もある。授業の豊かさと貧しさは、教師の生きる世界の豊 の世界を荒れ果てた貧しい世界としてしまっている場合も に操ろうとして、子どもを欺き、小手先の技術を弄して子 さに気づかぬままに、子どもをごう慢にも、己の意のまま 現実の授業には、一方では、教師が、自らの世界の貧し 子どもを豊かな世界へと導き入れている場合 教師の豊かな世界にもかかわらず、 いわば狭い牢獄に閉じ込め、

「魅力ある」ということは、どういうことか?

「魅力ある授業」という時の、「魅力ある」とはどういう

ものは存在しえない。

つまり、「魅力ある人物」の魅力とは

かで

地を指し示しているものと、思われる。 極めて多様である。 澄み切った境地さえもが生 一九八七年 さらに 子ども いや しかし、 とのできる人、 るのである。その人物に魅力を感じる人、魅力を感じるこ じる人々が居てはじめて、「魅力ある」という性格を帯び あろう。例えば、「魅力ある人物」は、その人物に魅力を感 に備わった「力」であるかのように受け取られがちである る。「魅力」といえば、何かその「魅力ある」人または物事 られる」だけでなく、「魅せられた」人は、冷静さを失い われるところが、「魅する」の特徴である。単に「引きつけ にか理解しがたい「不思議な力」によってであるように思 るかは、必ずしもはっきりとはしてはおらず、 さらに、その「引き付けらる」のは、どのようにしてであ けらる」ということがある、ということがわかってくる。持ち」あるいは「心」が、その人あるいは物事に「引き付 るいは物事などに「魅せられる人」があり、その人の「気 中にさせる。」とある。 ことであろうか。「魅力」という言葉は、辞書の説明には、 「夢中にさせられ」ということがある。 「魅する」人あるいは物事などがあり、他方に、 「魅する」は、「(不思議な力で) 人の心を引きつける。夢 「人の気持を引きつけて夢中にさせる力」とある。また、 ここで、注意しておかなくてはならない大事なことがあ こうしてみると、「魅する」という出来事には、一方に、 必ずしも単純にそれだけではないことは明ら が全く居ない「魅力ある人物」などという

がって、 るし、 力があること」を意味する場合もあろう。 さらに、時には、「この人物」が「多くの人々」にとって「魅 に「魅力を感じる」人々がいる、ということも意味しよう。 ということを意味するかも知れない。あるいは、この人物 力がある」といえば、暗黙のうちに、「私にとって魅力があ か、ということと切り離せないのである。「この人物は魅 その人物に「魅せられる」ことのできる人々の存在とその 人々との関係に相対的である、ということになろう。 つまり、「私はこの人物に心を引きつけられて夢中だ」 「魅力ある」ということは、「誰にとって」である した

ようにして生まれたかにより、何を「善し」とするかによ 力ある」ことは「善い」ことか? その「魅力」が、どの 動物や幼い子どもの「魅力」は後者であろう。では、 な在り方の巧まぬ「魅力」がある。女優のコケットは前者 の眼を意識し計算された、 か、あるいは、結果として生ずべきことであろうか。 「魅力がある」は、目標として目指すべきことであろう 一概に、「魅力あれば善し」とは言えないのだ。 どのような人々が何故いかに「魅せられる」のかによ 人為的な「魅力」があり、 自然 他人 魅

では、「魅力ある授業」とは何か?

味も少し明らかになってくる。 以上のように考えてくると、「魅力ある授業」の持つ意

ある特定の授業が私にとって 「魅力ある」と言えば、 そ

> っていることと同じである。また、その意味で、私は、「多て、この授業は「魅力ある」であろうと、私は考えると言 っていることと同じになる。 「授業の魅力」についてそのように考える私である、と言と考えており、また、私は、「授業」、「多くの人々」また と考えており、 くの人々」について、この授業に「魅せられる」であろう の知っている、あるいは、想定する、「多くの人々」にとっ くの人々にとって」この授業は「魅力ある」と言えば、私 なのである、と言っていることになる。もう少し広く、 は、私は、その授業を「魅力ある」と感じるような

実感を与え、そのことによってその授業が子どもたち自身 業が子どもたちに何等かの意味において、 者にとっても「魅力ある授業」として映る、という構造を して見ているある人にとって、そのいずれであろうか。授 考えることもできる。 に「魅力ある」と感じられる。そして、そのことが、参観 にとって、教師にとって、あるいは、その授業を参観者と 「子どもを見る目」と「授業を見る目」が必要とされるで 「授業が魅力ある」のは、その授業を生きている子ども が、その場合、 参観者にはそう映る 生きることの充

ある授業」だとすることには、問題が残る。仮に、 力ある授業」だとするある種の授業を以てそのまま「魅力 参観者である「多くの人々」が、ある授業理解から、「魅 子どもたちが「いつも教師の言葉をよろこんで聞いて たとえ

当然変わってくる筈なのである。

当然変わってくる筈なのである。

当然変わってくる筈なのである。

当然変わってくる筈なのである。

当ない子どもをつくるが、一つの教育ですらある」(武田常たいとっては、その参観者Aさんを含む「多くの人々」になって「魅力ある授業」とされた特定の授業が、全く「魅よって「魅力ある授業」とされた特定の授業が、全く「魅よって「魅力ある授業」とされた特定の授業が、全く「魅まって「魅力ある授業」とされた特定の授業が、全く「魅力ない授業」と映るかも知れないのである。そして、参観者Aさんがいたと想像してみよう。が、一人として、参観者Aさんがいたと想像してみよう。が、一人として、参観者Aさんがいたと想像してみよう。が、一人として、参観者Aさんがいたと想像してみよう。が、一人として、参観者Aさんがいたと想像してみよう。が、一人として、

「魅力ある授業」は無限に開かれている

だということが明らかになる。とともに、時期により異なってくるし、変化して行くものかかわる歴史の流れと共に、そして、授業の理解の深まり異なるだけでなく、一人のひとの中でも、その人の授業にこう考えてきたとき、「魅力ある授業」は、人々の間で

ことである、と。そのような、「魅力ある授業」を見る目と業を見る目」と「授業理解」が、次第に豊かになっていくことは、実は、私の「授こう言うべきであろう。私にとって、真に「魅力ある授業」は決して、最終的な形で規定すること「魅力ある授業」は決して、最終的な形で規定すること

引用・参考文献/

そう私は考える。

林竹二・灰谷健次郎者『教えることと学ぶこと』
武田常夫著『真の授業者をめざして』
国土社 一九七一年
国土社 一九八七年

荻野恒一著『現象学と精神科学』 - 小学館 - 一九八六年

世界書院 一九八七年一著『現象学と精神科学』

- 12 -